

第89号  
**ほほえみ**  
03 1 12

2003年新しい年が明けました。今年もよろしく  
お願いします。

昨年オープンした県立がんセンターの山口総長によ  
ると今、男性の2人に1人、女性の3人に1人は一生  
のどこかでガンに罹る。それほどガンは身近な病気  
である。一方で現代医学の進歩は著しく、早期に発見  
できれば9割以上のガンは治るということです。小児は  
さらに薬も効きやすいと聞きます。特別な病気でも  
特別な不幸でもない時代。今年も当たり前の日々を  
大切に生きましよう。

<第91回 ほほえみの会>

高島先生、がんセンター天野先生、さらには訪問教育の齊藤先生も参加し  
てくださり全部で9人が集まりました。

- ▽ 小学4年の女の子、悪性リンパ腫。9月に入院、ハイハイリスク  
ではあったが順調に治療が進みあと1回入院したら外来治療中心  
になる。4月から地元の学校に復学させたいが本人は戻りたくな  
いという。
- ▽ 中学2年男の子、リンパ性白血病。去年の7月入院、治療は3月  
までの予定。4月から復学の予定だが、新学期でクラス替えもあ  
り不安。仲の良い友達と同じクラスになるように学校に頼んでも  
良いものだろうか。

いずれも院内学級や学校の問題についての悩みが出ました。  
院内学級（正式には訪問教育）の齊藤先生によると  
現在は31人の生徒が在籍していて7人の先生がいる。定員は1人の  
先生に対して生徒は3人で定員オーバーの状態。  
基本的に院内学級は入院患者のためのもので退院した時点で退学し  
元の学校に戻ることになる。

しかし、退院後も居たいという希望もあり、また学習空白をなくすた  
めにも状況を見ながら対応をしているがそんなに長くはられない。  
また最近では入院中の長期外泊のケースもあり在籍者が多い。  
現在定員オーバーの状態です。新しい入院患者が入学できない状況もあ  
る。また退院した子が院内へ通う場合外部からの感染が非常に心配。  
地元校へ戻るためには学校の先生の理解が必要。  
その対応についてガイドラインがほしい。「がんの子供を守る会」で  
出している冊子が良い。  
今後小学校にこうしたガイドラインを配布するなど教師の理解を深  
めるための運動をするべきではないか。

学校の教師もどう接したらいいかわからない。教師、保健の先生共に  
過剰な心配をするケースも多い。友達の親も治らない病気だとかうつ  
る病気だと勘違いしている人もいる。退院して地元校に戻るとき教師  
が病院に来てくれれば親も交え医師が説明をする。院内学級の教師も  
希望があれば地元校に連絡することもできる。以前は学校まで付いて  
きてほしいというので一緒に学校へ行ったケースもある。  
とにかく直接話をするのが大事。

また4月から地元校に戻る人は3月上旬に本人の様子やクラスに  
ついて校長に言うておくことが大事だということです。

- ▽ 治療後子どもの体力がどの程度回復するのか不安だが・・・。  
がんセンターでは病棟全体がクリーンルームになっていることも  
あるが移植した日から歩かせている。退院も早いし、合併症も少  
ない。なるべく体を動かした方がいい。
- ▽ がんセンター小児科には現在4人が入院、小児科は5床だが4月  
から9床になる。また訪問学級も開設する準備を進めている。
- ▽ 建設中の子ども病院北館は3月に完成し中旬に病棟の引っ越しを  
する。B1は5階に入ることになるそうです。

次回は 2月 9日(日) 11時からです

ほほえみの会 代表 池田恵一 TEL054-247-9560  
E-mail アドレス k1iked@mx1.s-cnet.ne.jp  
ホームページ <http://homepage3.nifty.com/hohoemi/>